

## 形式のショーケース——マルチ視点ミステリー・湊かなえ『告白』

松本 和也 MATSUMOTO, Katsuya

### 【一】

今や、湊かなえ（一九七三〜）は、ミステリーという文学ジャンルにとどまらず、映画やテレビドラマへの原作・脚本の提供者としても広く知られ、文字通りのヒットメーカーとして活躍している。『高校入試』（二〇一〇）や『夜行観覧車』（二〇一三）といったテレビドラマの他、映画ならば阪本順治監督『北のカナリアたち』（二〇一〇）、原作は「二十年後の宿題」『往復書簡』幻冬舎、二〇一〇、所収）が近年の話題作ということになる。WOWOWのテレビドラマ『贖罪』（二〇一〇、原作は『贖罪』（東京創元社、二〇〇九）では黒沢清が監督を務め、後に劇場でも上映された他、各国の映画祭に招聘されるなどの展開をみている。こうして一瞥するだけでも、死（殺人）、等身大の悪意、日常に潜む歪んだ本音などをモチーフとして構成された湊かなえのミステリーが、映像化を介しつつひろく支持されているさまが確認できるのだけれど、その原点ともいえるのが、『デビュー作』『告白』（双葉社、二〇〇八）である。たとえば、『告白』が文庫化される際の「『独白系』ミステリーの最大

の話題作 『告白』が待望の文庫化！」（『ダ・ヴィンチ』二〇一〇・五）という記事には、次のような紹介文がみられる。

『告白』は、各章一人ずつの「独白」によって構成されたミステリー。単行本はすでに累計70万部を超え、4月の文庫化でさらに飛躍的に部数を伸ばすことは確実。6月の映画公開もアクセルとなって、今、もつとも注目されている「独白系」ミステリーなのだ。

ここに示されているのは、（文庫化を見通しながらの）『告白』のセールス上の数字、映画として映像化されるといふメディア・ミックス的な展開、さらには《各章一人ずつの「独白」によって構成されたミステリー》という小説としての特徴的な形式、の三点である。

補足しておけば、『告白』は松たか子を主演に迎え、『下妻物語』（二〇〇四）や『嫌われ松子の一生』（二〇〇六）などで知られる中島哲也監督によって二〇一〇年に映画化され、記録的な動員を果たすとともに、賛否両論を巻き起こしつつ、国内外の映画賞に輝きました。

さて、形式についていえば、すでに作品名をあげた『夜行観覧車』は時間軸を往還しながら展開させる時間操作、『贖罪』は章ごとに異なる語り手による独白、二十年後の宿題」は単行本タイトル通りの教員と教子による往復書簡、と小説としてそれとわかるユニークな形式が採られている。してみれば、個別の利害をもった多様な人物による多角的な視点設定に、携帯電話やネット上の掲示板、手紙や張り紙などの新旧メディアを織り交ぜた『高校教師』も、『告白』の延長線上に位置づけられる。

それらの原点とも目される『告白』の形式についていえば、確かに章ごとに異なる登場人物によるモノローグが配され、それゆえ「『独白系』『ミステリー』とも呼ばれ、また、そうした章の集積が必然的に『謎』に対して多角的な視線を差しむけることからマルチ視点と称されるもする。

もちろん、湊かなえ作品で採られたユニークな形式が、小説表現（史）からみて画期的だということではなく、それはむしろ古典的で凡庸ですらある。それでも湊かなえ作品がユニークだというのは、一つには、そうした局面にとりたてて興味のない読者（層）にもそれと気づき得るわかりやすいかたちで小説の形式が前景化されているということがある。また、ミステリーの核たる「謎」に関わるかたちで、形式がはらむ特徴（死角や情報のズレや時差）が活用されている。さらに、作家論的にいえばユニークな形式はほとんどの小説で継続的に用いられてきた。つまり、言葉本来の意味での新規（奇）性というより、今日、小説の形式を活用することでエンターテインメント性に接続しつつ、ポピュラリティの獲得にも直結させているという意味で、それはユニークなのだ。

## 【2】

湊かなえのデビュー作『告白』は、まず、単行本でいうところの第一

章にあたる「聖職者」（のみ）が書かれ、同作が第29回小説推理新人賞を受賞し、『小説推理』二〇〇七年八月号に掲載される。その後、続編として「殉教者」（『小説推理』二〇〇七・一二、後の第二章）、「慈愛者」（『小説推理』二〇〇八・三、後の第三章）が発表され、さらに後の第四章、第六章にあたる部分を書き下ろされ、二〇〇八年八月に単行本『告白』としてまとめられ、上梓される（二〇〇九年、第六回本屋大賞受賞）。

大胆にタイトルとして掲げられた『告白』とは、単なるタイトルにとどまらず、全編を貫く方法論でもある。ただし、本書にいう告白とは、単に隠してきたことを包み隠さず話す、といった営為をいうのではない。「対談 湊かなえ×中島哲也」（『ダ・ヴィンチ』二〇一一・二／構成・文門賀美央子）には、次のような興味深いやりとりがみられる。

**中島** 脚本化するために何度も読み返すうち、この作品は本当の感情が絶対に表に出ないように書かれているんだと気づきました。

決定的なことは書かないから、言葉の裏を想像すればいくらかでも想像できるし、それによって読む人たちを引きつけていく。そこが周到だな、と。

**湊** 普通の一人称だったら、語り手の真情がすべて吐露されるけれど、この作品の場合、一人語りとはいえ、あくまでも「告白」。告白には必ず相手がいるわけで、その人に対しては真実を伝えるより、自分がこう受け取ってほしいとか、こういうふうには誘導したいとかいう意図のもとにつくられた話をするのではないかと思っただけです。

以下、章ごとに形式の基本設定／特徴と主な内容（「謎」）についてま

とめていくことにするけれど、本節ではまず第一章に注目しておきたい。

第一章「聖職者」は、全編が中学校教員・森口悠子のモノローグで構成され、終業式のホームルームという具体的な場が設定されている。当初の話題は教員辞職の挨拶なのだけれど、それが問題含みの挨拶になるだろうことは、次の発話によって予示される。

牛乳の話はさておき、私は今月いっぱい教員を退職します。「別の学校に転勤？」いいえ、教員を辞めるのです。辞職です。なので一年B組のみんなは永遠に忘れることのできない私の最後の生徒ということになります。残念そうな声を上げてくれた人たちどうもありがとう。「辞めるのはあれが原因か？」そうですね、そういうことを含めて、最後にみんなに聞いてもらいたい話があります。

辞職理由にくわえ、「あれ」「みんなに聞いてもらいたい話」というかたちで〈謎〉が準備され、これから語られる話が、その〈謎〉をめぐる告白であることを森口は自ら宣言する。教師になった理由から教員としての日々を振り返る森口の話は、いささか私的にすぎる印象をもたらすのだけれど、次第にそれが自分の娘・愛美が校内で事故死したゆえであることが明らかになる。しかも、「愛美は事故で死んだのではなく、このクラスの生徒に殺された」というのだから、告白の衝撃は大きい。

こうして、森口が語りつつある〈謎〉が、「愛美の死の真相」Ⅱこのクラスにいる真犯人であることが明らかになる。森口の話りは、当初から、クラスの生徒を具体的に直接的な聞き手として想定し、実践されてもきた。本文には、生徒からの問い返しや、生徒への直接的な問いかけなども書きこまれ、聞き手を前にしての語りであることが強調される。ただ

し、当初は、ホームルーム中であり、生徒個々人が積極的に聞き手の役割を引き受けていたわけではない。その後、語るべき〈謎〉が明確に設定された時、森口は次のように述べて聞き手をふるいにかけていく。

廊下が騒がしくなりましたね。他のクラスはもう終わったのでしようか。部活動や塾のある人、それ以外でも、出て行きたい人はそうですね。決して愉快な話になっていきますから、聞いていますが、この先もつと不愉快な話になっていきますから、聞きたくない人は今のうちに出て行ってください。誰もいませんか？では、みんなが自分の意志を持って私の話を聞いてくれるものとして、続けたいと思います。

つまり、右の発話以降、教室にとどまった生徒は、自らの意志で森口の聞き手という役割を選んだことになる。逆にいえば、森口は、自らの告白を真実のものとするために、語り（手）の信憑性を担保・保証する聞き手Ⅱ証人として、生徒たちを再設定していくのだ。この「漠然とした聞き手から（内容的にいえば重い話が避けられない）告白の聞き手へ」という作中における生徒の役割転換は、現実世界の読者にも同様の質的転換——傍観的な聞き手から、〈謎〉をめぐる森口による告白の保証人へ——を要請する読解コードでもある。

その後、森口は実行犯二人をそれぞれ「A」「B」と称して、「愛美の死の真相」を語っていく。「殺意はあったけれど直接手を下したわけではないA」と、「殺意はなかったけれど直接手を下すことになったB」については、学校生活のエピソードや性格も織りませた話が語られ、直接の聞き手であるクラスの生徒には、犯人が誰か容易にわかる（現実世界の

読者にもそのことがわかるように書かれている。こうした情報を、しかし最後まで固有名を示すことなく語り終えた森口は、さらなる告白——「A」「B」への復讐について語りだす。「母親としてはAもBも殺してやりたい」けれど「教師には子どもたちを守る義務があります」という森口は、事故死という警察の判断を蒸し返すことはせず、「私は二人に、命の重さ、大切さを知ってほしい」と願い、次のような行動をとった。

私は二人の牛乳に今朝採取したての血液を混入しました。私の血液ではありません、二人がいい子になるように、そんな願いをこめて世直しやんちゃ先生、桜宮正義先生の爪の垢あかならぬ血液をこっそりいただいできました。

マスコミでも有名だったという桜宮は、HIVに感染したことで結婚こそしなかったものの、その実、愛美の父親であり、つまりは森口のパートナーなのだ。その血液を「A」「B」の牛乳に混入すること——これが、森口が語りたかった復讐／告白だったのだ。

ここで、こうした『告白』の道具立てについての批判にも耳を傾けておきたい。具体的には、大西赤人による「状況二〇〇九春——文学 あるべき『志』の決定的な欠落——湊かなえ著『告白』について」（『社会評論』二〇〇九・春）における、次のような指摘である。

『告白』は、シングルマザー、HIV、少年法、味覚障害、いじめ、ひきこもりというような現代的キードを巧みにちりばめながら、むしろ社会的な切り口によって描かれた作品なのだ。エイズを道具にしたことだけで短絡的に非難するつもりはない。しかし、『エイズ

患者の血液＝死への凶器』という基本プロットを立て、登場人物に終始それを追認させ、そのイメージを作者として最後まで否定せず、かえって増幅させつづけることよって読者にも恐怖を与えるという仕組みの『告白』は、僕にとっては決定的に『志』の低い作品と感じられ、この本が高い評価を得ている状況に対しては、ここに強く異議を唱えておきたいと考えるのである。

もつとも、『告白』やその作者が、エイズに関する偏見を助長していると短絡的にはいえないものの、曖昧で不確かな『イメージ』が参照されていることは確かで、その意味では、広範なポピュラリティーを得た『告白』を読む際の、読者個々人の留意点であることは間違いない。こうした指摘を肯いづつも、この復讐が『イメージ』を活用した、正確にいえばすぐれて言語的なものであったことには改めて目を向けておきたい。というのも、『告白』を読み進めれば明らかのように、この牛乳によって「A」「B」がHIVに感染することはなく、そもそも牛乳には桜宮の血など混入されていなかったのだから。となると、森口の復讐は、一言でいえば嘘（言葉）となる。ならば、なぜその嘘が真実性をもちえたかが重要で、それは当の嘘が、（森口が言葉を紹介してつくりあげた）告白というフレームの中に置かれていたからに他ならない。つまり、森口の告白（言葉）が真実性を帯びていたがゆえに、そこで語られたこととは真実性を付与されていったのだ。もちろん、ここでの真実性は、聞き手たる生徒たち（さらには、現実世界の読者）によって保証される。

『告白』第二章以降を読み進めていけば、こうした森口を視座とした捉え方は相対化されていくことになるけれど、少なくとも第一章の時点では、森口の戦略的な語りによって告白というフレームが十全に機能す

ることで、教室に放たれた言葉の連なりは水も漏らさぬ告白として成立してゆき、そのことよって疑念を差し挟む余地は排されていくのだ。

これは、第一章の舞台となった教室で起きていた言語的事件であると同時に、『告白』という書物を没入するように読み進める現実世界の読者に生起していた読むという営為でもあつたはずで、こうした仕掛けこそ、単なるモノログではなく告白という形式を採りつつ、ミステリーとしてのエンターテインメント性も兼ね備えた、湊かなえのユニークさなのだ。

### 【3】

ならば、第一章以降は、どのように書きつがれていったのだろう。湊かなえは、「湊かなえ INTERVIEW」（映画パンフレット『告白』東宝、二〇一〇）で《森口先生が告白する「聖職者」以降の章については、どのように組み立てたのですか》という質問に、次のように応じている。

二章は、あの教室にいた子の視点にしよう。その子は今、誰に、何を言いたいのか……たぶんそれは森口先生だろう。だったら、先生に手紙を書くことにしよう、と。あえて、先生に問いたいこと以外は書かないようにしました。彼女はルナシーかぶれだけど、それに触れたり、自分をアピールするようなことは書かず、自分の感情は排除して、事件に関して感じることを先生に伝えようと。

三章は直樹のお母さんの日記ですが、日記って、自分の内面を吐露しているようで、実は誰かに読まれることを前提にして書いている部分もあるじゃないですか。なので、自分の持っている汚い感情は書かず、でも本心は書いているようにみせました。＂人様にどこまで見せるか＂という最後のプライドみたいものはとっておこうと、

そういう書き方をしました。

四章の子は、何かを隠そうという気持ちはまったくないと思うので、整理して書かずに、むしろその場面ごとに、思いつくままに書くように思いました。

つまり、第二章以降は、第一章、とりわけ「愛美の死の真相」とその告白」という出来事を核として、それにさまざまな角度・距離から関わった人物を視座に書きつがれていったということになる。その際、それぞれの人物・利害に応じた情報のみせ方・パフォーマンスが織りこまれ、その帰結として各章の形式が選択・設定されていくことになる。

第二章「殉教者」は、森口が学校を去った後、同クラスにおける翌年度の出来事が、クラス委員長の北原美月によって語られていく。とはいえ、美月の言述は正確にはモノログではなく、特殊な告白形式を採る。

裁きのあとの出来事を、先生は知らなければならない。そう思つて、長い手紙を書いてみたものの、それをどうすれば先生に読んでもらえるのか……。いろいろと考え、苦肉の策だとは思いますが、この手紙を、先生が休憩時間によく職員室で読んでいた、文芸誌の新人賞に応募することにしました。近頃は十代の受賞者もたくさんいるので、可能性がないわけではないと思つたのです。

つまり、読み手として森口を想定しながらも、不特定多数の読者を対象とした小説として、学校での出来事が基本的には時系列に即して綴られていくのだ。担任のウエルテルこと寺田良輝、クラス内で集団的いじめにあう渡辺修哉、引きこもりになっていく下村直樹、いじめの標的に

なり、渡辺と親しくなっていく美月自身のこと、さらには渡辺へのいじめがやんだこと、下村の母殺しなどが、森口に向けて報告されていく。

「この手紙を書いている今は、夏休みです」とつづける美月は、やはり森口を唯一の読み手とした手紙・小説として一連のことごとを綴っており、第二章「殉教者」は第一章「聖職者」に対する後日談の意味合いが強い。さらに最後に、森口に向けた問いかけが、彼女の告白ゆえに辛いめにあった美月によって綴られ、この手紙・小説は閉じられる。

悠子先生、最後に一つ、訊いてもいいですか？

先生は、少年二人を自分が直接裁いたことを、今どう思っていますか？

ここに『告白』第二章以降の、ポイントが端的に示されている。つまり、当初〈謎〉と思われた「愛美の死の真相」は、すでに第一章で、かなりの部分明らかにされている。ならば、何が〈謎〉となつて『告白』をミステリーとして展開させていくのか。それは愛美の死に関わった人々の〈心〉に他ならない。犯行に関わった生徒二人の動機やそれに対して復讐を図った森口の真意（深意）ばかりでなく、生徒たちの家族やクラスメイト、担任教師まで、それぞれの〈心〉こそが〈謎〉となつて、章をまたいだ相互作用を生じさせつつ、この小説を展開させていくのだ。

そうであれば、先に引いた美月による第二章末尾の一節は、以後、『告白』の〈謎〉プロットの中心が〈心〉にあることを自己言及的に示したものと見える。つまり、それは文字通り森口への問いかけであると同時に、現実世界の読者に向けられたメッセージでもあり、興味を一定の方向へと誘導していく読解コードとしての役割を担っているのだ。

第三章「慈愛者」には、下村直樹の家族——その姉・聖美と母が言葉の書き手として登場する。冒頭と結末では、母の死と弟の殺人を知らされた聖美によって、母の日記を読む前後の戸惑いが記述され、その間に聖美が読んだという設定で母の日記が引用されており、つまりこの章は枠構造となっている。従つて、日記（形式）によって母の〈心〉が表明されつつも、それは聖美というフィルターを介したもののなのだ。

第三章冒頭で聖美の語りが強調していくのは、まずは下村家の「平凡さ」（「本当に何も思い当たることはなかった」と「親殺し」という事件の特異性、そのギャップである。ギャップを埋めようと聖美が多用する「歪み」という言葉で、それは「この半年のうちに何か歪みが生じる出来事が起きたのだろうか」という自問にきわまる。そうであれば、やはり「歪み」の要因はみえない領域——つまりは母と弟の〈心〉に設定されることになり、それは日記を読む前に準備される（現実世界の読者も抱くであろう）〈謎〉へ向けられた読解コードでもある。

もう一つ、日記についての言及・意味づけにも注目しておきたい。当事者たる母と弟しか知り得ない〈謎〉を解きたいと思つた聖美にとつて、弟には直接会えず、母は他界してしまつている。「ふと私は、一人暮らしを始めるとき、母が私に日記帳を買ってくれたことを思い出した」という聖美は、併せてその時の次のような母の言葉を思い出している。

「何かつらいことがあれば、お母さんはいつでも相談に乗るけれど、そんな気分になれないときは、一番信頼できる人に語りかけるような気持ちでこれに書いていきなさい。「……」楽しいことは頭に残して、つらいことは書いて忘れなさい」

これが「母の中学時代の恩師の言葉」だということを出しつつ、聖美は「母の日記帳を捜す」のだ。以下、「三月十日」～「七月十日」の五ヶ月あまりの期間の、一六日分の日記が引用・提示されていく。ただし、単純計算でも、第三章に示されている日記は一〇日に一回程度の頻度で、逆にいえば残りの八〇九割の日記は読み得ない（これが、もともとの空白なのか、聖美／テクストによる省筆なのかは判断不可能）。ここから浮上するのは、示された一六日分の日記にしても、修正は想定しにくいにせよ、全文である保証はなく、事件に関わる記述（のみ）が取捨選択されている可能性が高いことだ。直接事件に関わる箇所は妥当だとしても、間接的な情報については、聖美が「歪み」と関わると判じた箇所が、あるいは聖美がみせたいと思った二人の〈心〉が、クロージングアップされていると考えた方がよい。ここに、第三章冒頭部の聖美の語りの意味があり、それは以下に引用されていく日記の読み方をさりげなく示す、語りのパフォーマンス・読解コードでもあったのだ。

母の日記は、森口が家に来た翌日から始まる。直樹が嘘をついた一部を除き、「愛美の死の真相」が森口と直樹によって語られ、母にも共有されていくのだけれど、その日の日記では「これは全部、哀れな森口の作り話」だとまとめられ、告白／言葉をめぐる真実／嘘という主題が提示される。その後、直樹の家庭内での不審な挙動や担任・寺田の訪問を軸にした、母の苦悩する内面、溺愛する息子を正当化する妄想、推察される息子の〈心〉などが綴られていく。転機——その直後には破局が待っている——となるのは、「七月十日」の日記である。

「僕は森口先生に、エイズになるウイルスが入った牛乳を飲まされたんだ」

直樹は顔色ひとつ変えずに、こんな恐ろしい告白をしたのです。直樹の言葉を何度も頭の中で復唱するうちに、全身に徐々に鳥肌が立ってきました。

森口の話の嘘だと判じた母は、息子・直樹の告白は真実として受けとめている。どちらも、自分では確認不可能であるにもかかわらず、語り手に対する聞き手（母）の信頼度によって異なる受けとめ方がなされている。しかし、こうした偏った聞き方は、それゆえ次の息子の告白を、真実として受けいれざるを得ない状況に、自身を追いこんでもいく。

「森口先生は、あの子は気を失っていたただけだ、って。それを僕がブルに落としたから死んだんだ、って」

「そんな、まさか……。でも、それだって、直くんは知らなかったんだから、事故じゃない」

「ううん、違うんだ」

直樹は、満面の笑みを浮かべてこう言いました。

「あの子は僕の目の前で、目を覚ましたんだ。そのあと、僕はブルにあの子を投げ落とした」

これ以降、破局への展開ははやく、母が息子を殺す決意を日記に書き記した後、結果としては逆に直樹が母を刺殺するだろう。第三章としては、日記引用の終わりを示すアステリスクにつづき、この日記を読んだ聖美の戸惑いが記されていく——「母の日記を読み終えた今、私は出口どころか、自分の足元さえも見えなくなってしまうた」。母の日記を読むことで「真実」をつかもうとしていた聖美は、多くの断片的な情報は得

られたものの、自分の家族に起きた事態を理解することはできなかったようで、こと弟の〈心〉という領域に、近親者によって改めて〈謎〉が設定される。これはそのまま、(プロット展開の原動力としても、現実世界の読者に対しても) 第四章への興味喚起ともなるはずだ。

第四章「求道者」は、「鼻先を赤くして、とほとほと歩いている中学生。

—— 始まりの日。「周りをきよろきよろしながらプールに忍び込む少年。

—— 始まりの日から、一週間後。「晴れやかな顔で目を覚ます少年。 —

—— 事件、翌日。「声を震わせながら語る少年。 — 事件から、一ヶ月後。「

席につき青い顔をして俯いている少年。 — 家庭訪問から、一週間後。「

「部屋の窓から、ぼんやりと空を眺めている少年。 — 復讐、直後。「カ

ーテンの隙間から、そっと来訪者を見下ろしている少年。 — 復讐から、

約二ヶ月後。「黒い塊を呆然と眺めている少年。 — 復讐から、約四ヶ

月後。」といった、タイトルと時間指標を伴って映像化された八つのシー

クエンスが主な内容となる。とはいえ、その前後には、一連の映像をみ

ていると思しき「僕」を自称する人物が登場する枠構造となっている。

この「僕」こそ(殺人後の) 下村直樹らしく、自分の名前もわからず記憶の同一性もあやぶまれる状態で施設の部屋にいる。先の八つのシークエンスは、解離よろしく、かつての自身の身に起きたことを他人事のように傍観する映像が、「僕」にフラッシュバックしたものである。

ここでは、中学生活から殺人に至るまでの日々が、〈心〉の動きと併せて綴られているのだけれど、それは右の設定により、作中においては嘘とも真実ともいえない。つまり、これまでの『告白』の展開・情報からは、整合性もとれており、確からしいのだけれど、映像の終わりを告げるアステリスクにつづいては、次のような「僕」の言述が配されていく。

白い壁に映し出される映像は、いつもここで終わる。ここに出てくるバカな少年はいったい誰なのだろう。そして、どうして僕はこの少年の気持ちに手が取るようにわかるのだろう。

ところで、ついさっき、僕の姉だという人がやってきて、部屋の外から声をかけてきた。

「直くんは、何もしていないんだからね。悪い夢を見ていただけなんだからね」

彼女は僕を「直くん」と呼んだ。あの映像に出てくるバカ少年と同じ名前で呼ばれるのが気に入らなかった。ただ、仮に、僕が本当に「直くん」と呼ばれる人物のだとしたら、悪い夢というのは、あの映像のことではないかと思う。

これによって、「僕」がほぼ間違いなく下村直樹であることは判明するのだけれど、同時に、映像の中の「少年」と「僕」の同一性は、「気持ち」が手に取るようにわかる」という一節によって確からしく重ねられながら、一連の出来事は「悪い夢」「映像」としてしか語られず、客観的な事実の再現として確定的に捉えることは困難となつてもいる。つまり、別人格として、しかも曖昧な記憶を介すことで、映像の中の「少年」はさまざまなバイアスを被って書かれているはずなのだ。目や耳で確認可能なこと、ごとのについては、『告白』の他の章を参照することで虚実を判じることがある程度できるけれど、〈心〉についてはあり得た可能性の一つという域を出ることはなく、その多くが読み手の解釈にゆだねられていく。

第五章「信奉者」は、もう一人の少年、「A」こと渡辺修哉のモノローグ——ウェブサイト上に書き記された「遺書」から始まる。遺書執筆当初の時点で渡辺は、明日に控えた二期の始業式、体育館ステージ中央



の演台での爆弾自殺を計画していることを明かす。もちろん、それはその場にいる教員・生徒を巻き添えにすることになるけれど、渡辺にとつては「前代未聞の少年犯罪」によってマスコミに騒がれることこそがねらいなのだ。「自分はどのような人間として扱われるだろうか」と考え、「心の闇」などという陳腐な言葉を使い、ありきたりな想像を語られるくらいなら、このウェブサイトをそのまま公表してほしい」と願う渡辺は、第一にマスコミ（報道）宛にこの遺書を準備している。従って、遺書の内容についても「世間はいったい犯罪者の何を知りたいのだろうか」と、求められる情報を付度しつつ、「生い立ち、内に秘めた狂気、それともやはり、事件を起こした動機だろうか。では、そのあたりから書いてみようと思う」と、目的・対象を明確に意識しつつ書き起こされている。

殺人についての理念的な思索から書き綴られていく遺書は、しかし「価値観や基準というものは、生まれ育った環境によって決められる」「人間を判断する基準値は、一番最初に接する人物、つまり、大概の場合は母親によって定められる」という一節を介して、いつしか自身の生みの母を中心に据えた、家族の思い出へとスライドしていく。そこで綴られるのは、（家庭の幸福よりも）研究を目指す生みの母に捨てられ、再婚した両親から疎まれることで生じた疎外感・傷痕で、その感覚を渡辺は「小さな泡が一つ、パチンとはじける音がした」と表現している。

それからの渡辺は、「全国中高生科学作品展」への出品も、下村直樹を誘つての愛美殺害計画も、すべては生みの母に振り向いてほしいからだったことを隠そうとはしない。ここまでの『告白』の内容と重なる愛美の事件前後についても、法や倫理よりも生みの母に気づいてもらうため、という明確な目的意識から解釈・説明されていく。その動機は、事件後急速に親しくなった美月との些細な諍いを契機として、明るみになる。

「ママは自分を愛していたけれど、夢を追いかけるために、苦渋の決断で出て行った。なんて思ってるかもしれないけど、結局、あなたを捨てただけじゃない。そんなにママを待ちこがれてるなら、自分から会いに行けば？ 東京なんて日帰りで行けるし、どこの大学にいるかもわかってるんですよ。ぐだぐだ言いながら待ってるのは、あなたに勇気がないからよ。自分から会いに行つて、拒否されるのが怖いんじゃない？ ホントはもう、自分がママに捨てられてることに、とつくに気付いてるんですよ」

この暴言の代償として、美月は渡辺に殺されてしまうのだけれど、それは指摘が正鵠を射ていたことの証左でもある。実際、「すべての決着をつけるために、K大学に向かった」という渡辺は、そこで生みの母にとつて「子供という存在」一般ではなく、「修哉と名付けた子供が邪魔だった」ことを認めざるを得ない現実に直面する。その上で書かれるこの遺書のクライマックス・最大の動機とは、次のようなものである。

これからおこなう大量殺人は、母親への復讐だ。彼女に己の犯した罪を知らしめてやるためには、この方法しかないのだ。

そして、今回の証人は、ウェブサイトに載せられたこの遺書を読んでくれているあなたたちだ。少年犯罪史上に名を残すであろう明日の出来事を、どうか最後まで見届け、この魂の叫びを彼女に届けしてほしい。

つまり、渡辺の遺書は、一連の告白の中でも、メッセージ内容に比べ

て相手に届くことそれ自体が重い意味をもつ言述なのだ。遺書の内容はもちろん、そこに書かれた違法な行為も、すべて目的は一つの根から出ている。それゆえ、渡辺はこの遺書を不特定多数の人々が目にするウェブサイトに書き、事件の予告までしてしまう。それらすべての原動力こそ、生みの母に自己の存在を承認してもらいたいという動機なのだ。

その意味で、第五章は、肥大化した伝達の欲望を抱えた渡辺が、しかし当の相手が無関心だという現状にあつて、いかにして相手に自分の声を届け得るかという、ねじれた告白の試みと位置づけることができる。

また、現実世界の読者からみても、第五章の特徴ははっきりしている。というのも、先に述べたように、愛美の事故死を軸とした一連の出来事は、すでに『告白』で多くの情報が示されている。そうであれば、渡辺がフォーカスされたこの章に託された〈謎〉とは、渡辺自身が「心の闇」という紋切り型を否定しようとも、やはり当事者の〈心〉に他ならない。

その後、本文にはアステリスクがおかれ、場面は渡辺が爆発事故を起こそうとしている中学校の体育館という作中の現実世界（時間軸）に移る。壇上で作文を読み終えた渡辺が、スイッチを押しても爆弾が爆発せずには焦るといふところまでが渡辺視点で書かれ、章は閉じられ、なぜ爆発しないのか、誰が阻止したのかという新たな〈謎〉が設定される。

終章にあたる第六章「伝道者」は、再び登場した森口によるモノローグ——携帯電話による渡辺への語りかけで全編が構成されている。従って、全六章からなる『告白』という書物としてみれば、冒頭と結末に配された森口のモノローグが、あいだの四章を挟みこむ枠構造になっているということでもあり、それは情報量において終始圧倒的優位にたつ森口のアドバンテージを、形式的にも裏支えたものとなっている。

修ちゃん、ママよ。——とでも想像していましたか？ 残念ながらママではありません。森口です。五ヶ月ぶりですね。

このように始まる第六章では、(第五章で示された)「愛するママへのラブレター」(渡辺のウェブサイトをみてさまざまな情報を得て爆弾を解除したこと、終業式の日の牛乳に桜宮の血液は混入されていなかったこと、担任の寺田を半ば操っていたこと、渡辺の生みの母に会ったこと、などが足早に語られていく。そして、つねに「復讐」を忘れていなかった森口は「愛するママへのラブレター」によって、あるアイデアに想到する。北原殺害の件を警察に連絡したという森口が、しかし少年である渡辺に「復讐」するため採った手段。それは、渡辺の手によって、すべての引き金となっている生みの母を殺害させることであつた。

渡辺くん、私はあなたが作り、学校に仕掛けた爆弾を、解除しただけではありません。それを別の場所に設置し直してきましたのです。

あなたがスイッチを押さないことを願っていました。しかし、あなたはスイッチを押した。〔……〕

K 大学理工学部電子工学科棟第三研究室、そこが、新たに爆弾を設置した場所です。爆弾を作ったのも、スイッチを押したのもあなたです。

ねえ、渡辺くん、これが本当の復讐であり、あなたの更正の第一歩だとは思いませんか？

これが第六章／『告白』全体の結末部である。ここに「復讐」の成就が示され、森口による復讐譚という『告白』のストーリー(一面)は完

成をみる。それは同時に、現実世界の読者にとってみれば、愛美を殺された森口が抱えてきた〈心〉——悲嘆の深さ／復讐心の強さを、その言動を通して読むことでもあったはずで、プロット全体の中心的な〈謎〉とそれに対する解としての〈心〉が一つの大きなサイクルを閉じる。

ただし、急いで補足しておきたいのは、『告白』における全体・章単位における形式が果たしてきた重要な役割である。森口と渡辺の対決だけならば、第一章と第六章（つけたせば第五章）のみでも一応筋はたどれるものの、これほど立体的に各人物とその〈心〉を描出することはできなかっただろう。また、各章で展開された、モノローグを基調としたバリエーション豊かな告白の諸形式によって、ある面では書き得る領域の限定をひきうけつつ、作中人物に即した死角が逆説的に隠していた真意（深意）やさらけだしたい本音など、語り手のパフォーマンスを重ねつつ人物・〈心〉は示されてきた。そのことで、作品としては情報がズレと重なりをほらみつづ重層化され、そのすべてを見渡しえる現実世界の読者にとっては、複雑な現実の表象として作品世界が提示されるのだ。

#### 【4】

マルチ視点とも称される『告白』は、第一章と第六章がわかりやすく示すように、発端の出来事（愛美の死）がそれぞれの人物に、時間の経過を伴った影響を与えながら展開していく。それでも、複数の章において（変奏を伴いながら）反復される単一の出来事もあり、そうした場面では、告白する人物の利害やキャラクターが鮮明に示されるだろう。

ここでは、その一例として、愛美殺害の真犯人が（渡辺ではなく）下村だと明かす森口の告白が、どのような乱反射を招いたかみておこう。

まずは、第一章「聖職者」において、それぞれの当事者にとっての衝

撃の事実として、森口が真犯人を告白した一節を引いておく。

Aがまた殺人を犯したらどうするんだ？

冷静ですね、ゲーム脳というのでしょうか？ H I Vの話より殺人事件の話の方が落ち着いて聞けるなんて、私には理解しがたいことです。ただ、Aがまた殺人をというのには誤りがあります。「……」心臓を患っている人ならともかく、たとえ四歳の子供でも、あれで心臓を停めることはできません。「……」先程も言いましたが、愛美の死因は『水死』です。事件の翌日、Aは愛美がプールの中から発見されたことを知り「何で余計なことをしたんだ」とBに詰め寄りました。言葉の意図はまったく違います、私も同じことをBに言いたかった。助けを呼びに来てくれなくてもいい、せめて、そのまま逃げてくれればよかったのに……。

そうすれば、愛美は生きていたはずです。

これに対して、第四章「求道者」における当事者「B」たる下村直樹は森口の告白が進むにつれ、教室内のまなざしによって、「殺される、殺される、殺される！」と追いつめられていく。そこに、追い打ちのように、「B」が真犯人だと言明され、下村は次のような心境に陥る。

「渡、あ、えっと、Aがまた殺人を犯したらどうするんですか？」いきなりそんな質問をしたのは、小川くん。こいつ、おもしろがってる。

「Aがまた殺人をというのには誤りがあります」

僕のからだは深い水底へと、一気に引きずりこまれていった。

森口は「殺したのはB（つまり僕）」だと断言したのだ。あれくらの電流じゃ死なない。愛美は気を失っていただけだ、と。

〔……〕

みんなが僕を見ている。渡辺はどんな顔をしているだろう。確認して笑う余裕なんて、どこにもなかった。

ここでは、「Aがまた殺人をというのには誤りがあります」という森口のセリフが、場面の同一性を保証している。そこに書かれた〈心〉については、「A」たる渡辺修哉のケースと比べてみると歴然とした差異があり、それが二人のキャラクター（の差異）をあぶりだしてもいく。

第五章「信奉者」で、「終業式の日、クラス全員の前で退職することを告げた担任は、別れの挨拶と見せかけながら、事件の真相を語り始めた」と、当事者ながら冷静に話を聞いていた渡辺は、むしろ真犯人として名指されるのを心待ちに、まずは教室内から注がれるまなざしを心地よく受けとめている。その直後、やはり先の森口の台詞が反復される。

「Aがまた殺人を犯したらどうするんですか？」という調子に乗った馬鹿の質問により、衝撃的な事実が告げられた。

「Aがまた殺人をというのには誤りがあります」

当事者であり、事件をすべて把握しているにもかかわらず、何を言われているのかわからなかった。

「心臓を患っている人ならともかく、たとえ四歳の子供でも、あれで心臓を停めることはできません」

発明品を否定され、子供を殺したのは自分ではなく下村だ、と言われたのだ。自分は子供を気絶させただけ。その後、勘違いした下

村がプールに落としたことによって「水死」したのだ、と。皆が一斉に、真の殺人犯である下村に注目した。

恥。これ以上の恥さらしはなかった。その場で舌をかみ切って自殺してやろうかと思っただけだ。

こうして、時間的な振幅・出来事の進行と平行するように採用される、文字通り単一の出来事に対する複数の視点——マルチ視点という形式によって、森口の告白を動揺しながら聞いていた下村と、冷静に聞いていた渡辺の差異が、それぞれの〈心〉とともに描出される。それは、そのまま二人のキャラクター・愛美の死に対する受けとめ方の違いでもあるし、さらには現実が本来もっている重層性・複雑さを表象してもいる。

↑

このように、『告白』は、マルチ視点・「藪の中」（芥川龍之介）的な要素を部分的に内包しつつも、その時間軸の長さや登場人物の利害・キャラクターの多様性に呼応するように、形式においても、より多彩な形式が各章ごとに用いられている。その意味で、湊かなえ『告白』とは、エンターテインメント性をもったミステリーであると同時に、形式のショーケースとでも称すべき面ももちあわせており、その双方が有機的な関係を切り結ぶことによって成立した、ユニークな現代小説なのだ。

※本文引用は、湊かなえ『告白』（双葉文庫、二〇〇八）による。